過去の自分への手紙

Hideto TSUBOI (坪井秀人: Professor of International
Research Center for Japanese Studies, Kyoto)
✉ hidetot@h3.dion.ne.jp

(日本)国際日本文化研究センター教授。日本近代文学・文化史。『萩原朔太郎論——《詩》をひらく』(大阪:和泉書院, 1989)、『声の祝祭——日本近代詩と戦争』(名古屋:名古屋大学出版会, 1997)、『偏見というまなざし——近代日本の感性』(編著、東京:青弓社, 2001)、『戦争の記憶をさかのぼる』(東京:筑摩書房, 2005)、『感覚の近代——声・身体・表象』(名古屋:名古屋大学出版会, 2006)、『ラジオ放送局(コレクション・モダン都市文化32)』(編著、東京:ゆまに書房, 2008)、『イメージとしての戦後』(藤木秀朗との共編、東京:青弓社, 2010)、『性が語る——20世紀日本文学の性と身体』(名古屋:名古屋大学出版会, 2012)、『戦後日本を読みかえる』全6巻(編著、京都:臨川書店, 2018-2019)、『世界のなかの(ポスト3.11)』(シュテフィ・リヒター、マーティン・ロートとの共編、東京:新曜社, 2019)、『戦後日本文化再考』(編著、京都:三人社, 2019)、『越境する歴史学と世界文学』(瀧井一博・白石恵理・小田龍哉との共編、京都:臨川書店, 2020)、『二十世紀日本語詩を思い出す』(東京:思潮社, 2020)、『対抗文化史——冷戦期日本の表現と運動』(宇野田尚哉との共編、大阪:大阪大学出版会, 2021)、『戦後日本の傷跡』(編著、京都:臨川書店, 2022 [近刊])など。

A Letter to Myself in the Past

Since 2020, everything has changed with the worldwide spread of COVID-19 and the emergence of variants. In the field of humanities, we are still unable to figure out how to face such situation and how to translate it in the first place. One way is to relearn the representations of historical plagues and calamities, but it is a determined event of the past, and no one can judge whether it is effective as a means to solve the future situation. My essay takes the form of a letter written 10 years later by the future “I” to myself today. In the world 10 years later, “I,” who lives as a *Komorîto*, writes a letter to her/his past self, on the assumption that it is completely divided between two kinds of people: *Gaishûto*,

who continue to live outside as they did before the Corona era, and *Komorîto*, who do not go out at all but simply stay at home. Like any other disciplines, humanities have a common understanding that we cannot talk about phenomena that are not fixed or that continue to vary. That’s why we get anxious. In this essay, I have ironically described a situation in which the content written in the writing process is quickly invalidated.

Keywords COVID-19, Narrative from the Future (未来語り), Division of the World (世界の分断), Mutual Intolerance (不寛容)

前略 元気? いや、聞くまでもないよな。
僕の記憶があるかぎり、お前は馬鹿みたい
に忙しい時期だったけれど、少なくとも病
気はしていなかったしね。僕はコモリート
としてまあまあなんとか生きてるよ。い
ちいちコモリートだと名乗る必要もないん
だけど、名乗らないではさすがに今回は書
けないよな。なぜならこれは過去の自分
に向けた手紙なのだからね。過去の自分、ま
あ気安くお前、と呼ばせてもらおう、お前
はコモリートなんて言葉も知らないんだか
ら、まずそこから始めなきゃいけないよ
な。

しかしそもそもが過去の自分に手紙を書
くということはどういうことなのだろう。
未来の自分に書く手紙ならある。〈10年後の
僕に〉とか臭いタイトルを付けた手紙を瓶に
入れて学校のグラウンド掘って埋めたりす
るやつだ。書いて封をして投函した時間と
配達されて読む時間の時差を考えればわか
るように、手紙って基本は未来形だから
ね。いやまあすべての書くことがそう言う

なら未来形。読者は必ず未来にいる。でも過去に読者はいない。変えられない過去の変えられない自分に何を言ったところが聞いてはくれない。それでも僕が書いておきたいのは、この10年という過去の時間、もはや他の存在になり変わることもない自分自身に向かって書けば書くほど、変わらなかったことの帰結として現在の僕がいまここにいることを自覚させられるわけで、どうしたってそりゃあペシミズムに陥る。そう、そこに答えがある。不変不動なので問いかけても応じない、語りかけても黙ったままのお前、お前のその口を割らせることが出来ないことを確かめることで、僕はやっとペシミストになることが出来るのだ。それはつまり過去への手紙では二人称で断定文体を用いることが出来るからだ。ペシニズムを語るにはまず確信と断定が必要なのだ。

2020年の春頃から続いている〈コロナ時代〉も気づいたらはや10年だ。今年から教室での使用が義務づけられた中学高校の検定日本史教科書では1945年以後の時代区分を昔みたいになく〈戦後〉とは呼んでいない。冷戦崩壊以後の1990年から2020年までの30年は〈新自由時代〉、そしてそれから今までが〈コロナ時代〉として教えられている。これは他の世界の国々でも同じ。世界共通で同じ時代区分を持つのは〈冷戦期〉とかを別とすれば、これまでで初めてのことじゃないだろうか。〈コロナ時代〉のグローバリズム万歳だ。

さて、どうしてこんな時代になったかは察しがつくだろう。お前がいま知っているのはCOVID-19の、日本では第5波が落ち着いて来た頃だろう。緊急事態宣言とか蔓延防止措置とか、今から見れば懐かしいそうい

うお触れが連発されて、東京ではオリンピックまでやってしまい、菅内閣の支持も急降下、政権も持たなくなったのに、首相が辞任すると言った途端に感染者が急に減り始めたのだ。

大方の人々はこれで感染の波はもう来ないだろうと高をくくっていた。今のお前もだ。2年近くもの間、海外に出ることが出来なくなって鬱々としていたお前はこれで錆び付いていたパスポートを使ってあの窒息した日本を脱出できるとひそかに胸をときめかしていた。何しろお前はそれまで月に最低1回ぐらいのペースで海外と行き来する生活をしていたからね。しかし海外どころか日本国内の移動もめっきり少なくなって、授業も会議もほとんどがオンラインになり、ひたすら家に籠もって、一日の中で外の空気に触れるのは洗濯物を干すのと郵便受けを見に行く、あるいは宅配を受け取る時だけという生活になってしまった。海外の研究者や研究機関との共同プロジェクトの計画も全てが頓挫するかオンライン開催に切り替わった。それでも一つ一つの企画にお前は望みを託し、最後の最後まで未練がましく現地開催にこだわったが、それぞれある段階が来るたびに断念しては対応の変更を余儀なくされた。そういう挫折の繰り返しだったから、第5波以後は今度こそはまた元の生活に戻れると期待したわけだ。まあ、それは今でも同情はできる。

だが残念ながらその後も事態はよくなかった。日本でも世界でも予想外なことが次々に起こり、〈コロナ時代〉という時代区分が定着して、このままこれが人新世の最終期になるのではと観念する空気も広がってきた。ワクチンは国産で増産体制に

入り、接種は毎年3回打つのが通例となる一方、世界的にはワクチン格差が極大化して、もともと何の指導力も発揮できていなかった世界保健機関(WHO)もワクチンが一度も届かない国家や地域の現状については見て見ぬふりをするようになった。しかしワクチンが気軽に打てる地域でも、次から次に新種の変異株が登場して、命名するのにギリシャ文字の24文字では足らなくなるありさまで、ワクチン開発もとうとう断念に追い込まれた。もっとも、ワクチン接種は死亡率をある程度は下げるので、古株のワクチン接種はその後もガイシュート中心に続けられた。その後日本では第10波まで感染の波を繰り返したところで、メディアもコロナ報道に麻痺した人々の関心を引かないことを悟って一切感染状況を報道しなくなった。いや正確に言えば、第10波以降完全に世界が二分化してしまったのだった。

どういうことか。第10波以降〈感染慣れ〉してしまった人たちはどんどん外出して深夜まで飲んで騒ぐ。ライブやスポーツ観戦もマスクなしで熱狂。安価な〈闇ワクチン〉も流通し、注射針を使い回した人たちから重症者が拡がり、治癒後の後遺症も深刻化した。しかし、ガイシュート連中用のメディアはもういちいちそうしたことを報道しない。なぜなら、世界はリスクを受け入れてコロナ時代以前と同じ外出生活続ける〈外出人〉と、それを拒否して家に籠もり生活と仕事の全てをオンラインで済ませる〈籠居人〉に世界のありとあらゆるものが二分されることになったからだ。日本語では前者の呼称を〈がいしゅつびと〉、後者を〈こもりいびと〉と呼び、誰が言い始めたのかそれぞれ〈ガイシュート〉そして〈コモリート〉と略称

されるようになったのだった。

ガイシュートたちは基本的には集団免疫説の信奉者たち。しかもセルフ接種が簡便化されたワクチンを打っておけば後は自由に活動すればよいと考える人々で、ワクチン接種を拒否する人も多い。要は接種のことはもはやどうでもよく、自己責任で自由を手に入れようという人々だ。一方のコモリートは(この言葉がくりモート)を内包しているように)何年にもわたって籠居生活を成熟させたことで全てのことが自分のプライベート空間のリモート生活で事足りると信仰する人々で、外の世界には頭のいかれたガイシュートたちが跋扈しているので危険だし信用ならないと、外出を絶対的に忌避する。

世界が完璧に二分されてしまったために、国家も会社も学校も学会も、もちろん住宅もすべてがガイシュート専用とコモリート専用に分けられた。会社はどちらかだけで運営されている所もあるが、基本は両者のニーズに合わせて二種類の行政サービス、二種類の会社、二種類の高校や大学が出来たのだ。そして両者は絶対に交わることはない。ガイシュートはリモートでのコミュニケーションを非人間的だと軽蔑し、直接同じ場所でふれあう自由がなければ人間は終わりだと考えている。だから握手やハグ、キスにも積極的で、フリーセックス論者も多い。その結果毎日何人かの死者が出て仕方がないと考えている。どうやら飛行機もそれなりに本数が飛んでいて、出入国にも面倒な制限は何もないらしい。なぜなら空港と飛行機会社はすべてガイシュートたちだけで運用されているのだから。

私たちコモリートは彼らが気が狂っている

ると思っているのでその情報を知ろうともしない。だから、正確なことはお互いに何もわからない。コモリートの生活はリモートで世界中の人々とあらゆることが共有できる。限界はあるが一緒にご飯も食べられるし性的な関係だって結ぶことができる。というか今のお前がすでにやっていることを少しだけ延長したに過ぎないのだが、世界はそれで何不自由なく充足するのだ。コモリートが外出するのは死体になったときだけだ。死体処理のときだけコモリートと契約しているガイシュートの死体処理会社と関わる。だがどのみち死んでいるのだから同じことだ。

さて最後に大事な学問の話だ。お前はきっと嘆いているだろう、飛行機に乗って玄界灘を渡り赤道をこえ、凍結した黒龍江／アムール川を歩き、サハリン北緯50度線の日露旧国境を自分の足で跨いだときのあの感覚を忘れてしまいそうだと。僕も数年前までは夢を見ればそんな夢ばかり、ガイシュートに転向すべきではないかという妄想に苦しめられた。それがあつた時から妄想だと割り切ったら吹っ切れた。すべて人との触れあいも、本屋や図書館での書物との出会いも所詮オンラインの画面で行われていることと何も変わらないのだ、と。ガイシュート研究者たちは血眼になって生の資料を探し出し奴らの研究業績を築き上げようとしているが、われわれコモリート研究者はそういう無駄なことはもうしない。食品の宅配と糞尿処理、電気とガス(そして死体の引き取り)は相変わらずガイシュートが担当するように、必要なら資料調査やその転送作業をしてくれるガイシュートたちと契約すればよい。そこには紛れもない格差が

あるが、そこはお互いさま。ガイシュート向けにコモリートが行うサービスもいろいろあるからね。例えば何かって？ 簡単なことだ。死にたくなるほどつらくてさびしい、この状況に適応するためのペシミズムとはなにかを教えてやることだ。彼らも自由に生きるばかりではバランスが取れない。それに多少の自殺者も出てこない、彼らの社会にもメリハリがないだろうからね。

どうだい、10年後の未来は楽しそうだろうか？

2031年10月1日